

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

The Effect and Its Duration of Imagined Contact on Intergroup Attitude of Japanese

氏 名

胡 安琪

## 論 文 内 容 の 要 旨

近年、少子高齢化などによる国際化に伴い、在留外国人が急増しており、日本人と外国人が共存し、生活していくための国際化基盤の構築が重要だと考えられる。一方で、人種偏見・差別に関する研究は、日本では主に実情の記述に留まっており、心理的過程を考慮した認知変容の理論を用いた研究は十分とは言えない。一方、海外では研究が盛んで、特に Allport (1959) の接触仮説が多くの研究のベースとなっている。その仮説によると、異集団同士の二者が接触することによって、お互い好意的な感情を持てる場合の条件は、両者ともそれぞれの集団のステレオタイプを持たない者が、対等な立場で、共通目標に向けて協力合えば集団間偏見が軽減できるとしている。この理論の延長線で近年、実際に接触しなくても、外集団成員との友好的な接触を想像することで、外集団への態度を好転させ、偏見が軽減できるとする仮想接触仮説 (imagined contact) が提唱された (Crisp & Turner, 2009)。この理論によると、偏見は心理学的介入を用いて低減でき、より友好的な集団間関係に至る。しかし、仮想接触の研究は欧米などの多民族・多文化社会で実施されおり、対象者に対して仮想的であっても、接触のシナリオは現実感がある。その一方で、日本人のように直の外集団との接触が少ない人々には適用されていない。そこで本論文は、日本で仮想的接触の効果を検討するため、独自の仮想接触シナリオを作成し、外集団との接触条件を統制しながら、その効果を実証的に検証することを目的とした。また、仮想接触の持続性についての文献が少ないことから、その効果がどの程度残るのかについての検討も目指した。

本研究では、異文化間接触経験が比較的少ない日本人を対象に、仮想接触アプローチの影響を検討する最初の試みであり、次の仮説及びリサーチクエスチョンを検証した。(RQ1) 日本人は中国人、韓国人に対してどのような印象を持っているのか、そしてどちらにより否定的な感情

を持っているのか。(H1)仮想接触アプローチの実施により,対外集団態度が改善する。(H2)仮想接触アプローチの実施前と比較すると実施直後,1週間後,1ヶ月後の時点で,より外集団に対する友好的な態度を示す。これらの仮説とリサーチクエスチョンを検討するために,5つの探索的研究を行った(N=)。日本の文化的背景に適した仮想接触シナリオの刺激は,日本人にとって想像しやすく,外国人と直接接触を経験したことが少ない場合でも,日本人の外国人に対する偏見を軽減し,対外集団態度が好転することが実証された。

第1章では,接触理論や仮想接触アプローチによる外集団への偏見や対外集団態度における影響について検討した先行研究を引用し,知見を整理した。先行研究では,仮想接触アプローチを実施すると対外集団態度において,社会的距離の縮まり,外集団評価の向上,集団間不安が軽減,そして接触意欲の向上が見られることが示されている(e.g. Crisp & Turner, 2009; Miles & Crisp, 2014)。しかし,これまでの研究にはいくつかの問題があげられる。近年の研究では,仮想接触は外集団との直接接触経験が少ない人々の対外集団態度の向上にこそ,有効であることが提唱されている(Miles & Crisp, 2014)が,仮想接触に関する研究は既に国際化した欧米やヨーロッパ諸国で実施されており,実験参加者が外集団と日常的に接触がある状況下でのみの検討にとどまっている。日本人のような,外集団との直接接触経験が比較的少ない人々を対象とした研究は数少ない。また,先行研究では仮想接触アプローチの効果の持続性について縦断研究を用いて検討したものが非常に少ない。以上の問題点を踏まえて,本研究の目的は日本人の文化的背景に適した仮想接触シナリオを作成し,それらが日本人の対外集団態度に与える影響を検討,さらにその持続性について検討することを目的とした。

第2章では,日本人の中国人及び韓国人に対する態度について検討した(研究1)。日本人が中国人及び韓国人に対して抱いているイメージを明らかにするための調査を行った。結果として,日本人が実際に中国人と韓国人の両方に対して否定的な感情を持っていることが示された。また,集団間不安と社会的距離が対外集団態度の形成に影響していることも明らかとなった。日本人は韓国人に対して中国人に対してよりも,社会的距離を感じており,それが外集団評価などを含む偏見の指標に影響していることが示された。中国人と韓国人に対するイメージについて自由記述を行った場合でも,韓国人に対してより否定的な見方をしていることが明らかになった。そのため,研究2では韓国人を外集団として設定した。

第3章では,仮想接触アプローチが日本人の持つ外集団態度にどのような影響を与えるかについて検討した(研究2,3)。研究2では,実験参加者が外国人との直接接触経験を持たないと想定される日本において,仮想接触がどれほど効果的であるかを検討した。否定的な認識を持っている外集団に対して仮想接触が有効な方法であるかどうかを検討するため,韓国人を外集団とした。結果,接触理論(Allport,1954)の友好的な接触に必要な4つの

必須条件を含めることで、日本人の文化的背景に適した仮想接触シナリオを作成することができた。このシナリオを用いて、日本人が持つ外集団に対する偏見にもたらす影響を検討した結果、仮想接触シナリオを読み、想像した群では、統制群に比べ、外集団に対する社会的距離が縮まり、集団間接触の不安や脅威が軽減したことが示された。肯定的な仮想接触を実施した群では統制群よりも偏見が軽減していた。研究2では、仮想接触アプローチが外集団との直接的接触が少ない人々においても対外集団態度を改善させる可能性があることが示された。また、中国人が日本における外国人人口の多くを占めていることから、韓国人以上に日本人に対して脅威を与える可能性があると考え、研究3では、中国人を仮想接触シナリオの外集団として設定した。結果、中国人に対する態度を改善する上で仮想接触アプローチの実現可能性が示された。ポジティブな集団間接触を想像した群は統制群に比べて、中国人に対してより好意的な態度を示した。

第4章では、日本社会における仮想接触アプローチの影響の持続性について検討した(研究4,5)。研究4では、仮想接触アプローチを実施する前、直後、1週間後、及び1か月後の4時点において事前、事後テストを行った。縦断研究を行うことで、仮想接触アプローチの効果の実験室外での耐久性を検討した。結果、直後の時点では仮想接触アプローチの影響が全ての尺度において確認され、1か月効果が持続する要因も存在した。研究5もまた、仮想接触の影響が実験室外において持続するののかについて検討したが、研究5では実験参加者は1つのシナリオを読むだけではなく複数のシナリオを読み、想像した。結果、仮想接触シナリオを複数読んだ群は統制群に比べて、韓国人に対する集団間態度が改善していることが示された。仮想接触アプローチ実施直後においては先行研究と同様の結果が得られた。さらに、仮想接触シナリオを複数読み、想像した群の実験参加者は1か月後の事後調査でも韓国人に対する態度が好転していることが示された。具体的には、韓国人との将来の直接接​​触に向けての不安が軽減し、接触意欲が向上していた。

第5章では、本研究において明らかになったことについて、総合的な考察を行った。全体として、本研究では仮想接触アプローチが日本の文化的背景において適応可能であり、中国人及び韓国人に対する対外集団態度を改善することが明らかとなった。さらに、仮想接触アプローチは対外集団態度を改善し、偏見を軽減させる上である程度の持続可能性を持っていることが示された。しかし、本研究の限界として、持続性に関しては中国人と韓国人の間で一貫した結果がまだ示されていない点があげられる。また本研究は仮想接触仮説の理論的枠組みを支持する結果を示したが、外集団との直接接​​触経験が比較的少ない人々に対して仮想接触アプローチがより効果的である(Hoffarth & Hodson, 2016)かどうかに関しては十分検討されていない。また、外集団との直接接​​触が少ない個人は、仮想接触シナリオを読んだ後にその状況を鮮明に想像できない可能性が示唆されている(Husnu & Crisp, 2010)ことや個人の外集団に対する態度がメディアの影響を受けやすい可能性があること

から,仮想接触仮説の持続性については,更なる研究が必要だと考える。今後の研究においては,日本人のような外国人との接触機会が限られている国における仮想接触アプローチの理想的な実施方法条件を明確にする必要がある。

本研究の意義は,日本の文化的背景に適した仮想接触アプローチを作成,それらを用いて,外集団との直接接触を経験する前から対外集団態度を好転させることで,日本人と外国人の間で起こりうる問題の予防策を確立し,将来的に日本人と外国人との共生社会の構築に貢献できると期待される点である。